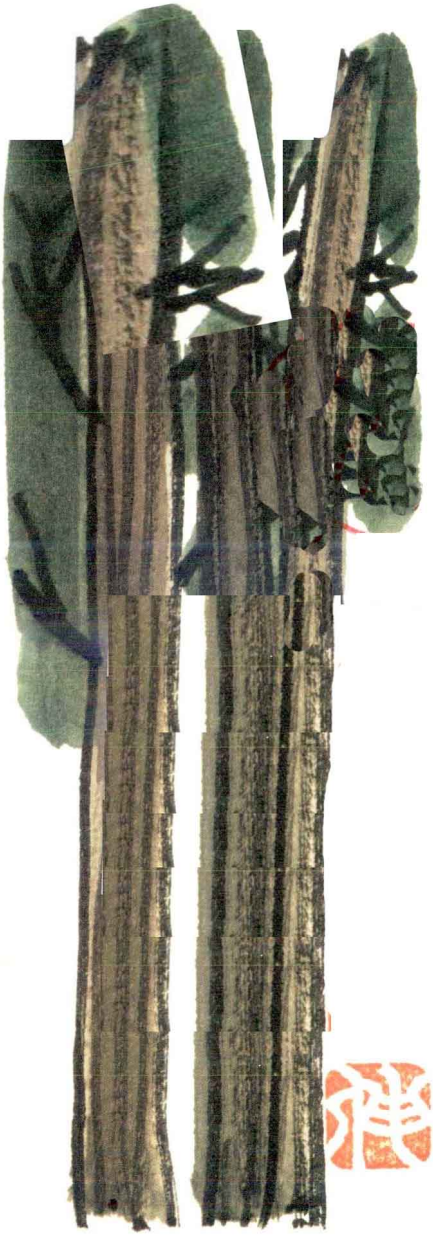
武蔵坊辨慶（一）

今　東光



武蔵坊辨慶（一）

今東光

学習研究社

武蔵坊辨慶(一)

昭和52年11月22日　初版発行

著者　今　東光

発行者　古岡　滉

発行所　株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4の40の5
郵便番号　145
電話　東京720－1111
振替　東京8－142930

編集責任　桜田　満

編集協力　株式会社ぱぴるす

印刷／製本　中央精版印刷株式会社

©1977　KIYO KON　Printed in Japan

0393－164 571－1002

＊この本に関するお問合せやミスなどがありましたら文書は，東京都大田区上池台4－40－5　(〒145)学研ユーザー・サービス部「武蔵坊辨慶」係へ，電話は東京(03)720－1111へお願いします。

＊本書内容の無断複写を禁ず

目

次

變童 7
水争い 27
追放 46
出家 64
決闘 82
離山 101
播磨路 118
夢野 139
和田ノ岬 158

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

書写山 178
曾左村 199
男の妬み 219
たくらみ 238
書写山炎上 260
出雲路 282
辨慶島 302
鰐淵寺 323
辨慶随想 345

装幀／挿画　御正　伸
口絵写真　サンケイ新聞社提供

武蔵坊辨慶 (一)

變童

「また新しい稚児が来るなげじゃ」
比叡山西塔の南谷十坊、東谷九坊、北谷十二坊の寺々の法師等は寄るとさわると噂し合った。誰しも人間は新しいものに興味と好奇心を寄せるものだからである。
「何所からおわすのじゃ」
「紀伊ノ国じゃげな」
「はて、紀伊とは床しい」
「何故にな」
「紀伊も熊野の女には滅多に持ち物の馬陰蔵な見せるなと申すぞや。しきりに追うて来るげな」
「これ、何を言う。それは女児のことよ」
「ほい、これは稚児殿でござったか」
彼等は花をあざむく變童を期待した。三塔に比べもののない美しい稚児に対する見ぬ恋にあくがれて、そぞろに手が物につかぬと歎く法師さえあった。

それほどの騒ぎの中に、春も終りの頃、延年舞もすんで山が静けさを取りもどした時分に、山駕籠にも召されず、檜笠に竹の杖ついて二、三人の下人を従えた客が北谷の金台院に着いた。師の権大僧都が引見すると、

「これが、あの鬼若丸かや」

と驚嘆された。紀伊国牟婁郡田辺の里からの書面によって、鬼若丸という小童を御手許に奉るとあったので、いずれは頑是ない少年と思っていただけに、今、目の前にむずと座っているのを見ると口もきけなかった。

それもその筈で、見かけは如何にも稚児造り。頭は房々と濃い髪を稚児輪に結い、眉を描き、地紋紗の水干に紫裾濃の袴をはいているが、背の高さは六尺あまり、色あくまで黒く、らんらんと金椀ほどある大きな眼からは怪しい光を放ち、馬をくらった狼のような真赤な口を一文字に結んで、袖口からあらわれている二つの腕は大人の太腿ほどあるのだ。何とも言い知れぬ怪物で、それが師の御坊の前でも悪びれた風情もなく不敵な面をしているのだ。

「鬼若よ」

「はい」

「坂本よりお山まで五十町、西塔千八百尺の登りは疲れたろう。少し休んでは」

「いえ、少しも疲れませぬ」

「や、疲れをおぼえぬとな」

「とっとと駆け上って参りましたれば、供の奴原がへとへとにくたびれまして」

息切れしたとも見えぬ面だましいだ。それを金台院の法師等は襖のすき間からのぞき見して、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

「見やれ、あれが稚児殿かよ」
「化物ではあるまいか」
と囁き交わしながら、まったく期待に外れた鬼のような稚児のことは、二度と口に出しては噂をしなくなった。
西塔北谷の十二坊はもとよりのこと、金台院にも二、三人の稚児はいた。
比叡の三塔、すなわち東塔、西塔に横川の稚児等はまだ出家得度をしない俗体なので、山法師のように頭を剃っていない。従って山法師等にとって緑の黒髪は浮世の女人を連想させるのか、世にも珍重したものだ。
三塔では、それぞれ一の稚児をえらび、その三人の稚児から三塔一の變童を選出して、これを稚児山王と称した。つまり山王の権化という意味だ。
比叡山の御守護神は日吉山王で大和の三輪大明神であり、地主権現は小比叡にまつられた。稚児山王は比叡の法師等にとっては、お山を代表する美しい芸術品でもあったのだ。
金台院の稚児達は自分等の別寮に入室して来た鬼若丸を迎えてとまどうた。遊び友達としては、手にあまるほど大きすぎるのだった。彼等は朝夕に経を習い、書を学び、延年の舞を修め、声明をおぼえなければならなかった。鬼若丸も彼等と机をならべて経をよみ、習字もしたが、延年の舞などは相撲をとるようで、てんで舞にならないのだ。
「その手振りでは」
と兄弟子の法師が何遍もやり直させると、次第に顔を真赤にして腹を立ててくるのだ。
「足は、どうと踏んまえて」

と教えると、鬼若丸は
「糞ッ」
と力んで足踏みすると、途端に、ばり、ばり、ばり、と音立てて延年舞の稽古場の板敷が踏み折れてしまった。
「これは」
鬼若丸も（しまった――）という顔をしたが、舞台を踏み抜いたのでは後の祭だ。
「おい、聞いたかよ。あの鬼稚児は延年舞の稽古中、舞台を踏み抜きおったとよ」
「へえ、撃剣の稽古と間違えたか」
「さもそうず」
法師等は笑い話として伝えたが、師の御坊もえらい奴が舞い込んで来たと思った。
「あまりあの鬼若は怒らせるなよ」
と師の御坊は金台院の法師等に注意を与えた。
「それじゃと申して」
「あれは父祖伝来の血のなせる業じゃ。稀代の力持ちに生れついたは天晴れながら、桑門には不必要なのじゃ。従ってあの鬼若はなるべく、そっとして置いてたも」
院内の取締りに従っている兄坊にとっては、この師のおさとしは不平不満だった。
「これでは示しがつきませぬ」
「まあ、まあ」
師の御坊には存じ寄りもあってか、穏やかに押えて居られたのである。

美貌の稚児は院内はもとよりのこと、一山の恋慕の対象になったものだ。

豪壮な山法師が大道狭しと肩を張って歩くのに寄り添うて、花もあざむく美しい稚児が甘ったれながら腕やら腰にまといつくのを、比叡の山の一本松にすがりつく藤の花に譬えて、見る者は羨望したものだ。

僧兵として天下に聞えた悪僧は、例外なく稚児を持ち、そのために血を流す決闘も厭うところではなかった。

それればかりではない。

有徳の老いた聖も稚児を賞美したことは、後の世の絵巻ではあるが醍醐の三宝院に伝わる「稚児灌頂」という素晴しい絵によって知られる通り、老いも若きも稚児には熱中したものである。

もう一つ歴とした文献がある。これは比叡山の中興の祖といわれる慈眼大師天海大僧正の蔵書、すなわち天海蔵という文庫に秘められた一本で、足利中期の写本である。従って原本はよほどの昔に作成されたものだろう。書名は「弘児聖教秘伝」と名づけられ、あろうことかあるまいことか恵心僧都の御作という言い伝えのもとに、世々密かに伝えられて来たものであった。この本の面白いのは師僧の覚悟、稚児の振舞いを教え、その稚児の開眼作法を伝えたところにある。

こういう作法さえ厳粛に守られたのを見れば、如何にお山で稚児は珍重されたかわかるだろう。高野山のごときでも例外なく稚児を貯え、山内の各寺院は妍を競うて華美を争ったが、高野の聖たちは弘法大師が稚児始めの根本だと信じ込んでいるのだ。

この稚児は諸山諸寺に存在した。おおむね大寺ばかりでなく、小さな寺の法師さえも女人には思いを懸けなかった代りに、稚児だけは一人でも貯えたいと、へそくりをこしらえたものだ。

稚児は美しくなければならない。
しかしながら美しいだけでは三塔の孌童とは言われなかった。それには学問も優れ、行儀作法を心得、何よりも心のたけが問題とされた。
心のたけ優れた稚児は、ものの哀れを知らなければならない。ものの哀れを知らないのは、たとえ美しい容貌はしていても禽獣に劣ると賤しめられたのだ。
そういう稚児の概念を、まるで踏み破るような稚児が鬼若丸だった。金台院の法師等は鬼若丸を憎むよりは嫌った。
「あの稚児姿を早く止めさせられい。あれでは如何なこと見苦しい。早う頭を剃って坊主にするがよい」
とは金台院ばかりでなく、西塔北谷十二坊の山法師の呟きだった。
「やあい、西塔の化物を見たかよ」
「いや、まだじゃ」
「まあず、話の種じゃよ。金台院の鬼稚児を見てこられい」
「それは是非とも見たい。何も後学のためじゃ。稚児にも鬼稚児というのがあるのか」
「あるとも。紀伊は田辺の海のほとりから、大きな海亀の背に乗ってただよいついた化物よ。末代、あのような稚児は比叡のお山には二度と現れぬぞや」
「それにしてもお山の稚児も変ったものじゃのう」
「何故にな」
「昔は学問のよく出来るもの、舞の巧いもの、歌うて声の好いもの、とりわけ美しい容貌を珍重

したものじゃが、金台院の権大僧都の御坊は、いかなる御もの好きからそのような怪物を召されたことか」

「そうとも。そのような化物がお山に登るとは何か不吉なことが起りそうじゃな」

「されば、近きためしがよ。天台座主明雲僧正猊下の御流罪このかた、山は戦々兢々じゃ。ひそかに源氏に心を通わせている法師もある中で、またしても不吉なことなど起そうものなれば、平相国清盛入道にどのようなお咎めを蒙るやもしれぬ」

こんな会話は東塔でも横川でも方々でささやかれていたのだ。あまりに美しいのも噂になるが、あまりに醜いのも一つの立派な存在価値があるものだ。

一山の法師等は一目、鬼稚児を見て話の種にしようと西塔北谷へ押しかけ、金台院のあたりをうろちょろした。

「鬼若よ。お前を見ようとて、此頃、沢山の法師等が当院のあたりに居るから、あんまり姿を見せなさるなよ」

と兄坊が注意すると、却って鬼若丸は不愉快になった。人の好奇の目にさらされるのは誰しも快いことではない。兄坊等はそんな不作法な山法師を押えることをしないで、こちらに外へ出るなというのは無法ではないか。鬼若丸は金台院の兄弟子等に対して腹が立った。それゆえ彼はわざと外へ出た。

「うわあ。噂にたがわぬ」

彼と出会った法師等は、まるで悪魔にでも出会ったようにぴたりと話をやめて、足早やに去っていった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c